

「イエスのまなざし」

聖霊降臨祭から年間に戻り、6月に入りました。ご承知のように6月は「イエスのみ心」の月です。私たちは、主のみ心を黙想し、これを実践するよう聖霊から促されています。イエスのみ心、それは父のみ心であり、そのまなざしは、いつも私たちに向けられています。しかし、その神様の目に映っているものは何か。主イエスは、一体どこを見ておられるのか。「み心のままに」というなら、私たちはそのまなざしの向こう側に目を留め、主の目に映っているものを見ることです。共に「主のまなざし」を黙想しましょう。

◆「野の花、空の鳥」(マタ6:26-28)

イエスのまなざしを思うとき、次の二つの言葉が思い浮かびます。「野の花」と「空の鳥」です。アシジのフランシスコは、そのみことばのごとく、鳥に話しかけ、花を愛しました。私たちも神様がお造りになった世界に心向けて、その声に耳を傾けてはどうでしょうか。フランシスコは花や鳥に何を、聞いたでしょう。神様の愛でしょうか。それとも御父が蒔いた種でしょうか。「野の花」も「空の鳥」も、神様からの美しいメッセージを讃えているようです。フランシスコはそれらの自然の中に、神の調和と秩序を見出したのではないのでしょうか。

◆福音の種

イエスは、神からいただいたその調和と秩序の種を、混んとしたこの世界に撒かれた方です。イエスは、現代世界の人間たちが好む、物質主義や消費主義、果ては科学主義など、あらゆる混沌を生み出す、すべてを捨て去り、質素に生きる暮らしを求められているのです。自然と和解し、これに抗うことなく謙虚に生きる。その道はまだ閉ざされてはいません。二千年前に撒かれたこの「福音の種」を、私たちが咲かせましょう。神様がお造りになったものから、花を咲かせるなんて、こんな大きな喜びは他にありません。福音宣教とは、この「福音の種」を蒔き、咲かせ、育てることにほかなりません。

◆神の救いの協力者

これからも私たちがこの世界で生き続けるためには、二つの言葉がキーワードになります。一つは「協

力」です。これは神の救いの協力者となる、ということです。そもそも神がお造りになったこの世界は、人間が神と協力して救いへと導くためにあります。それをどうして一握りの人間が自分勝手に浪費し、破壊し、己がために消費していいのでしょうか。今、自然世界は悲鳴を上げて苦しみ悶えているのではないですか。十字架の道行きで叫ぶイエスの声が聞こえてきます。

◆傷つけられた世界との連帯

二つ目の言葉が「連帯」です。これは、他者に向かって印す初めの一步、ということです。主のまなざしはこの世界で傷つけられた人、貧しい人々に向けられています。世界の至る所に多くの貧しい人が体は傷つけられ、心は痛、体は病んでいます。それでも彼らは生きていかななくてはなりません。「連帯」とは、こうした人々に気付き、結び合わせられることです。しかし、それは決して同情や憐みから連帯する、という意味ではありません。彼らこそ、私たちの兄弟であり、姉妹であるという意味での連帯だからです。

◆「私の友である」(ヨハ15:14)

イエスは弟子たちに「もはや私はあなた方を僕とは呼ばない」と言われました。なぜなら「僕は主人が何をしているか知らない」からです。イエスは「父から聞いたことをすべて話した。だから、もはや僕ではなく、友なのです」。これはイエスと弟子の関わりが従属から相互愛に変わったということです。ゆえに、私たちもイエスを友として愛を生きるのです。神の愛は、まず貧しい人々に告げ知らされます。我らは使徒となり、出かけて行く宣教者なのです。